



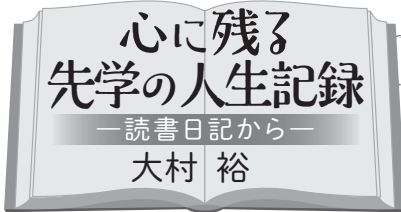
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.211
2021.4.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第21回

ドロシー・G・ウェイマン著／蜷川親正訳 『エドワード・シルベスター・モース』(上・下巻) (中央公論美術出版 1976年)

ダーウィンの学説を支持し、彼に絶大な敬意を払っていた米国人エドワード・S・モース(1838~1925年)の伝記である。著者のウェイマンはモースの娘のイーデスの友人である。モースの日誌や彼の親友ジョン・グールドに当たった膨大な手紙類の他、彼女が日本で収集したモース関係資料および関係者への聞き取り結果などをもとにこの伝記は書かれている。

モースは明治10(1877)年来日し、東京大学で理学部動物学の主任教授となって日本の青年たちに2年間ほど指導をしたほか、東京府荏原郡大森村所在の大森貝塚を発掘して模範的な発掘報告書を作成し、日本先史考古学研究の基礎を作った学者である。なお大森貝塚の発掘は、そこから出土する貝類と現生貝類を比較して、形態の変異を調べることに主眼が置かれていた。環境の変化に対応して生物が変異を重ね、環境に適応した個体が生き残って「種」の転成が実現して行く、というダーウィンの進化論を実証しようという狙いがあったのである。モースは、長兄が19歳の時に腸チフスで死亡したとき、牧師が葬儀において、兄がまだ洗礼を受けていないので、あの世において地獄の業火で苦しめられると説教したことに反感を抱き、キリスト教に対して懐疑的になっていた。このため、聖書の「創世記」を否定する「進化論」を先入観なしに受け入れたのではないかと思われる。

モースは厳密に言えば正規の高等教育を受けていない。少年の頃、学校の授業はそっこのけで、陸産貝類の採集に夢中となっていた。後年、そのコレクションがハーバード大学教授のルイ・アガシーの目にとまって、彼の「学生助手」となり、研究者の仲間入りを果たすのである。しかも、ハーバード博物館の資料の整理をする傍ら大学の講義の聴講も許されたのであった。この特権を得て、モースは様々な自然科学関係分野の専門知識を修得してゆくことになるのであるが、一般的な常識から言えば、所謂正規の「学歴」はほとんどないといってよい。これに加えて一つの専門分野に生涯をかけるというタイプの学者ではなく、様々な研究分野(動物学・考古学・民族学・天文学・社会学・日本陶器研究など)に手を広げて行く学者であったので、「アマチュア」というレッテルが貼られがちであった。特に専門を深く厳密に掘り下げることを好む日本では、その傾向が根強くあるように見える。

さて、この伝記を読む限り、モースという男は性格的に欠点の多い人物という印象を受ける。彼はささいな迷惑に対しても怒りを爆発させる生来の性格があったという。少年時代には、3回も退学処分を受けている。先生たちはモースの荒々しい気性、権威に対する反抗心、授業を無視する態度に手を焼いていたという。あるときなど、先生に対して「聾」になるほどの張り手をくらわしたこともあったらしい。青年期に入った頃、父親が亡くなると、母と三人の妹の生活の面倒を次兄のフレッドに委ね、自分は研究三昧に耽る。恩師であり恩人でもあるアガシーとは、進化論

の受容をめぐる対立だけでなく、家から博物館に持ちこんだ陳列棚と陸産貝類コレクションの代金をアガシーが支払わないことに腹を立てて関係を断っている。ハーバード大学から離れた後、日本に渡って東京大学の教授となるも、望郷の念にかられてわずか二年で東大を退職し、学生たちを捨て去ってしまう。日本の陶器の魅力に取りつかれると、莫大な借金をして陶器を買い集め、家の中は陶器であふれかえり、妻のネリーを苦しめる。著者はモースに対して「唯一の目標のみを心に抱いた利己主義の塊」と評している。しかし、モースに接した人たちの多くが、彼を敬愛し、積極的な支援を惜しまなかったのであった。兄のフレッドはモースの科学に対する才能を信じ、心から弟を励ましていたという。妻のネリーは終生夫を愛し、尊敬の念を持ち続けていたし、親友のジョン・グールドは、モースがルイ・アガシーのもとで薄給(月給25ドル)に甘んじて仕事をしてきた折には、貧しい月給の4分の1を割いて彼に提供していたのである。モースのもとで秘書の仕事を行っていたマーガレット・ブルックスは彼を忠実に理解し、生涯独身を通して彼が死ぬまで仕え続けている(著者は「疑いもなく彼女はモースを愛していた」と書いている)。東大でモースの教えを受けた石川千代松や佐々木忠次(二郎)郎らは、晩年になっても「モース先生」に敬愛の念を抱いていた。さらには、モースが様々な分野の研究に手を出す都度、周囲の仲間や友人たちは喜んで資料の提供や資料収集を買って出ているのである。モースが多くの人たちに愛された理由は一体何だったのであろうか。著者はその理由を「彼の明るい心と、人を惹きつける率直な人柄、そして「態度に少しも悪意や気難しさがなく」、「知力、独立心、勇氣」を持っていたからだという。日本人に対しては「珍しい者とか、未開人として考えないで、対等の人間として受け入れた」ため、彼らに愛されていたのだとも指摘している。モースは莫大な収集資料をハーバード大学、ボストン美術館、ピーボディ博物館に引き渡し、蔵書は関東大震災で多くの被害を受けた東京帝国大学に寄贈した。これに関して著者は、モースについて最後にこう結んでいる。

「正式の教育を受けず、権力や富もなく、ただ彼の能力をつくすことにより」種々の業績を残した。「彼の科学研究は、或いはいつか過去のものとなるに違いない。彼の書物は忘れ去られ、彼の名前は人の記憶から消え去るかも知れない。しかし、東京、ボストン、ケンブリッジそしてセーラムの博物館の中を、眼を輝かせて見て歩く子供たちがいる限り、エドワード・シルベスター・モースの温かい心はその使命を果たしているのである」。

1925年の夏、モースは貝塚とそれを構成している貝の変化についての論文を完成してサイエンス・マンズリーに送った。そしてその年の冬に、突如発作に襲われて急逝した。最晩年まで大森貝塚発掘での問題意識を温めていたのである。没後95年経っても、彼の学問と人柄を慕う日本人の考古学研究者が大勢いる。私もその中の一人である。

*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

- | | |
|---------------------------------------|---|
| ■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第21回) 大村 裕 …1 | ■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第204回) 片山弘喜 …3 |
| ■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第18回) 井川史子 …2 | ■考古学者の書棚 「日本考古学百景 戦前の絵葉書にみる遺跡と遺物」 中島 透 …4 |

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました(第18回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

18.1. 第15回太平洋学術会議

3年任期ということで引受けた人類学科長のお役目だったが、3年目の終わりが近づいた頃、あともう2年やってくれないかというお話があったのに応じて、結局5年間で学科長室ですごした。1980年の夏に満期解放され、その翌年は研究休暇をいただいて、例によって日本各地を駆け回って出版物をあつめたり、新資料を見せていただいたりした。人類学科長就任中も1978/79年の年末休暇を利用してインドで開催された国際民族学・人類学会(ICEAS)第10次大会に参加したり、1979年の夏休みには沿海州のハバロフスクで開かれた第14回太平洋学術会議で研究発表をしたりしたが、任期終了後の1983年2月には同学会の第15回大会の一環として計画された“太平洋地域における考古科学”と題するシンポジウムに参加するためニュージーランドまで足をのびした。30分ばかりの研究発表をするのにすいぶん遠いところまで行くんですねと冗談をいわれたが、その理由は、1980年に学術振興会から出版された古文化財編集委員会編の『考古学・美術史の自然科学的研究』だといっただろう。64点の論文を集録した大変立派な620頁の出版物で、Natural Science Approaches in Archaeology and Art Historyという英文のタイトルがついているが、内容については“環境”、“年代”、“生業”、“材料と技術”など7項目の見出しの英訳が列記してあるのみで、論文の英文要旨もついていない。こんなに多数の研究者が日本でどんな仕事をしているのだらうと、外国の研究者にとって興味津々なのは当然だろうとおもわれる。それで私にお誘いがきたわけらしく、それまで行ったことのなかった南半球に出かける好機会だろうと思ってお引き受けした。といっても、私は自然科学的手法をつかった研究をしているわけではなく、その結果を利用させていただけるだけなので、あくまで消費者の立場から見た感想ですとお断りして、私なりの概観を述べさせていただいた。考古資料を対象にした自然科学的研究の“消費者”と“製造者”という言葉が会場で一時流行した。

18.2. マギル大学の東アジア研究センター

1968年に大学理事会の決議によって「東アジア研究センター」が発足し、同時にアジア研究に不可欠な言語能力を養成するために「東アジア言語・文学科」が設置されたことはすでに触れた(12回、No.199)。その際述べたように、マギル大学ではかなり早くから中国関係のコースを歴史学科のカリキュラムの一部として提供していたので、東アジア言語・文学科が発足したばかりの1969-70年度には中国語のコースが、初級、中級、上級と3段もうけられていた。登録者総数は58名、それが2年後の71-72年度には113名に増加している。これに対応するような日本語のコースを設けてほしいという学長宛ての要請に97名の学生が署名して1969年に提出している。

当時は日本も高度経済発展時代に入った時期だったから、歴史学科、人類学科の他に経済学科や経営学部にも日本関係の研究をする教員が加わっていたので、学生たちが日本に関する知識をいろいろな角度から勉強する機会が増えていた。これらの新入教員の場合、日本研究者として採用されたのではなく、それぞれの学科で必要な専門分野に該当する候補者中で、たまたま日本関係のテーマを追求している人が選ばれたということだった。それは私がマギルに就職した際、総合人類学の分野のうちで先史時代を扱う考古学者という資格で採用されたわけで、日本研究が主な理由ではなかったのと同様だ。いずれにしても、“たまたま”日本研究をしている教員がふえて、日本に関するコースへの登録が上昇するなかで日本語・日本文学の講座を設置する必要が痛感されていた。

そのため、在モンリオールの財団、日本商社などに援助をもとめることになった。それは1960年代の大学拡張時代がおわって1970年代にはいと大学財政の縮小期になったので、外部からの援助資金でもなければ新講座を設けるのはとても無理だという状態

になっていたからだった。私は「東アジア研究センター」創立以来その運営委員会に属しており、日本研究分科委員長もつとめていたので、副学長、人文学部長、当時センター長を務めていたポール・リン教授らと財団巡りをしたり、日本国大使や総領事との会談に同席したりした。各方面との交渉が難航中のところ、1972年に国際交流基金が発足し、各種の公募プログラムが公表された。外国の教育機関に日本関係の講座を新設・拡張するのを援助するプログラムに早速申請書を提出した。その結果、1974年度から3年間日本語と日本文学を教える教員のポストを新設するのに必要な助成金を支給されることになった。この資金の条件は教員の給料の1/3は受け入れ側が受け持つこと、そして3年契約の終了後は受け入れ機関の常設ポストとして継続するという条件だった。この条件はどうやら満たすことができ、日本語・日本文学担当の教員のポストは継続、そして1985年には交流基金の講座拡張プログラムに再び申請して、日本語・日本文学のポストをもう一つ増やすことができた。東アジア言語・文学研究学科の専任の教員は中国語と日本語と2名づつということになった。マギル大学のロゴマークの両わきに“アジア研究センター”を日本語と中国語で書きこんだTシャツはその頃センターに属していたスタッフと学生がデザインしたものだった。



▲マギル大学のロゴマークに東アジア研究センターを中国・日本語で入れたTシャツ

実はその頃、1983年から88年の5年間、東アジア研究センター長と東アジア言語・文学科の学科長は私がつとめていた。センターは東アジアに関する学際的な研究と研修を促進するベースという意図の機関で専任の教授陣はなく、東アジア言語・文学科には専任4名と2-3名のパートタイムの教員が属していたが、いずれも管理職にはむかない若い方達だったので、センター長、学科長は他の学科に籍のある教授または准教授がつとめていた。その順番が私のところにまわってきたわけだが、本学でのアジア研究はまだ揺籃期だったから、やりがいのある仕事でもあった。上記のように国際交流基金に申請して常設講座を徐々に増やしてゆく一方、同基金の客員教授プログラムにも毎年応募して、1985-86年度には筑波大学から文化人類学者の綾部恒雄先生、次いで86-87年度は早稲田大学から鈴木弘先生、そして88-89年度には私の母校、津田塾大学からのちに学長になられた飯野正子先生に来ていただいたように手配してセンター長の最後の年をおわっている。客員教授プログラムは、日本の文化、社会に関する講義を日本から来られた先生から学生たちが直接聞く機会を作るとともに、本学の教員と日本の研究者との交流を促進するのに有効だった。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員・2009年以來名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁護子先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 204

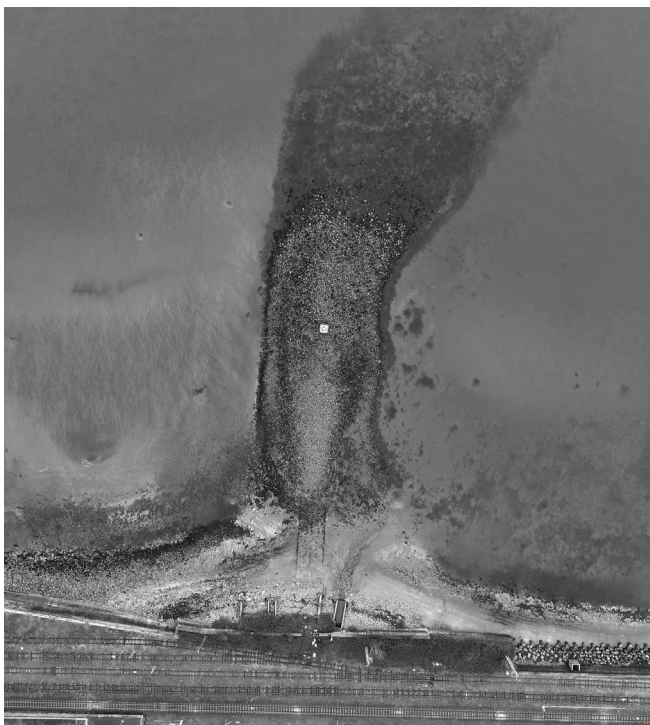
森棧橋跡 ～北海道茅部郡森町

片山 弘喜

森町(もりまち)は北海道の南西部、噴火湾(内浦湾)を臨む駒ヶ岳の麓の北西側に位置しています。

今回、私が紹介するのは、近代の遺跡である森棧橋跡です。森町の市街地を流れる森川の河口から西に約330m離れた水深0.8m～標高0.2mの海岸に位置する水中遺跡で、満潮時は海面下、干潮時は陸上となり、潮位の状態によってその姿が隠見する水際に立地しています。

遺跡は、明治4年から明治6年に行われた札幌本道建設の中で唯一の航路として整備された森・室蘭間を結ぶ定期航路のうち「森村埠頭」として築造された木製の棧橋の跡地になります。明治5年に起工し、翌6年に竣工した棧橋は全長約257.5m、幅約6.3mで南北に伸びた前方部が北東方向に曲がり「くの字」を呈する形状になります。北海道を訪れた人々の足となり、明治14年に行われた巡幸の際には札幌からきた明治天皇一行もこの棧橋から上陸しており、杭跡の北方には『明治天皇御上陸地記念碑』も建立されています。



▲森棧橋跡空撮写真

この航路は明治26年に青森・函館間の定期航路が室蘭まで延長となったことを受け廃止されますが、明治43年に棧橋の先端部を「T」型に改修して再開され、昭和3年に長万部と室蘭間の鉄道が開通したことにより利用客が減少し、同年廃止となります。その後は波浪等の影響により徐々に滅失していき、現在は橋脚の一部である木杭や板材とその周囲に集積された円礫を残すのみとなっています。

調査は、文化庁を中心に検討を重ねていた『水中遺跡保護の在り方について(報告)』で方向性が示されたことや、近年の気候や自然災害等の影響により遺跡が消失される危険性が懸念されたこと等をきっかけとして実施されました。まず平成



▲森棧橋跡近景

29年に地表に露出する杭と周辺地形の測量調査を、次に平成30年には私が主担当となって詳細分布調査をそれぞれ行いました。気象庁で発表されている潮位表を常に見続けながら、干潮時に陸上での発掘調査と同様に調査区を設定して試掘を行いました。活動時間は潮が満ち始めるまでの時間に限られたため、長くても半日、短い時は2時間程度しか現地に滞在することができず、翌日には砂で埋没してしまうため、迅速かつ正確な調査が求められました。また、海流の影響により打ち上げられた海藻が遺跡全体を被覆している状態となることもあり、その除去に丸一日費やしたこともありました。干潮時は陸上になるからと、陸上と同様の方法で実施した調査でしたが、自然環境の影響を強く受ける水際の遺跡の難しさを痛感した調査となりました。

平成29年度と平成30年度の調査を合わせて251本の木杭と14枚の板材が出土し、砂に埋没した杭の状況から、さらに南へと杭列が伸びることが分かりました。また、遺構の周囲に集積された石は北側の海中に向かって北東方向に伸びており、遺跡の範囲については更なる調査が必要になるかと思えます。

森棧橋跡は北海道の交通史を示す重要な遺跡ですが、それだけではなくボランティアガイドによるツアーが行われるなど地元でも大切にされている遺跡です。前例が少なく、方法を模索しながらの調査となりましたが、遺跡の保存に最善の方法を尽くせるよう、この遺跡と向き合っていきたいと思えます。

参考文献:

- 森町史編さん委員会編 1980『森町史』
- 文化庁 2017『水中遺跡保護の在り方について(報告)』
- 森町教育委員会 2019『霧ノ木2台場跡Ⅱ 鳥崎遺跡Ⅲ森棧橋跡』
- 森町埋蔵文化財調査報告書 第26集
- 森町教育委員会 2020『鳥崎遺跡Ⅳ 霧ノ木Ⅱ台場跡Ⅲ森棧橋跡Ⅱ』
- 森町埋蔵文化財調査報告書 第27集

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは小田島 賢さんです。

考古学者の書棚

「日本考古学百景 戦前の絵葉書にみる遺跡と遺物」

平田健 編／吉川弘文館(2015)

中島 透

私はモノを集めるのが好きである。子供の頃はコインや切手を集め、大学で考古学を学ぶようになると当然のことながら考古学書を集め、他にも何か興味を持ったことがあればそれに関連する資料や道具を集めたりといった具合である。大学を卒業して故郷で就職すると、地元の歴史に関係のあるモノをいろいろ集めるようになった。と言っても高価なものではなく、古い観光案内、旅館のパンフレット、お土産の置物といったような、もとは無料や安価で、一過性のものであったり、地元だからこそ残りやすいものを特に注意して集めている。そんな中に絵葉書がある。寺社仏閣、城跡などのような観光名所、町の風景、催事や記念ものなどで、とにかく種類がたくさんあってキリがないので珍しいものを中心に細々と手に入れていた。

携帯電話やメールなどが普及した現在、わざわざ手紙を書くという場面は少なくなった。ましてや絵葉書を旅先などから家族や友人に出すという人はなかなかいないのではないだろうか。それでも観光地などに行くと、今でもその土地の名所旧跡などの絵葉書がお土産物として売られている。美術館などでも手紙用というよりは手ごろなミュージアムグッズとして扱われ、気に入った作品の絵葉書を買って、額に入れたりして飾ることも多い。本来の用途が形骸化していることを前提として今も製作されているモノもちょっと珍しいのかも知れない。

今回ご紹介する本書は、日本で発行された考古学に関する絵葉書を集成、研究したものである。書店で初めて見た時は、ありそうでなかった意外性に驚くとともに感激した覚えがある。編者様がご自身で収集し、また関係機関の資料を調査してまとめられているのだが、私のような収集癖の強い人間から見たら趣味と実益を兼ねた夢のような本である。また、出土資料から研究が発する考古学において、二次資料である遺跡や遺物の絵葉書を研究するという切り口は新鮮である。

本書では、絵葉書の歴史や変遷、研究史等が冒頭にまとめられており、まず絵葉書の基本を知ることができる。その上で、本書で扱われる考古学絵葉書とはどういうものかを定義し、その内容を分析する。時代は戦前までのものとし、学史研究上の資料、画像としての資料、製作に関わった考古学者やその製作背景など、考古学絵葉書という対象に様々な角度から光を当て、その秘められた情報を最大限に引き出している。また、集成された考古学絵葉書の年代を特定または推定し、時期区分を設け、各期の特徴を見出すことで、考古学絵葉書というフィルターを通した新たな考古学史を浮かび上がらせている。さらに考古学者の手元に残された絵葉書の分析や基になった写真の調査などから、考古学絵葉書がどのように利用されたのかを考察し、それらが研究成果の速報的な意味を有していたことを指摘しており、非常に興味深い。

写真図版には、全国各地の考古学絵葉書が紹介される。これらを見ると、印刷の精度がよく、遺物は細部も観察に充分耐えるものが多い。一般に古い絵葉書と聞くとやや低質なイメー

ジを抱きがちだが、古くても画像の質はよく、準写真的な扱いができる。そして何より、撮影された現物が現存しない場合が多く、それが唯一のビジュアル的資料になるという重要な要素がある。本書に掲載された絵葉書の中にも撮影された現物が失われたものがあるから、この絵葉書が遺物の代わりということになる。その点でも資料目録としての本書の情報量は多い。また絵葉書において考古資料の彩色を再現したり復元しているケースというものがあり、モノクロが主体の時代背景において、色の情報というものの重要性を製作者が意識し、それを絵葉書で試みているという点も面白い。

巻末には考古学絵葉書の年表が掲載されている。絵葉書自体は膨大な数が存在するが、考古学絵葉書となると編者によれば全体の1%にも満たないのだという。しかも、考古学関係者や機関などでの比較的限られた範囲での製作、流通が多かったとのことで、発行データは充分でなく、現存しているものも相当少ないと想定されたであろう中、これらを探し出し、実見し調査されたことを思うと編者のその情熱には頭の下がる思いである。

本書に掲載されている絵葉書で私の地元に関係するものがある。諏訪湖底の曾根遺跡のものである。明治41年(1908)に同遺跡が発見され、東京帝国大学の坪井正五郎が来て調査をしたときの一連の絵葉書である。1枚は藤森栄一の著作等にも掲載されていてそれなりに知られているが、他のものはこの絵葉書以外には知られていなかった。絵葉書そのものが歴史資料として価値を持つ瞬間である。また、絵葉書の見落とせない価値に、キャプションがある。それがどんな場面や資料なのか明記されているので、何の写真であるかがわかる。近年、地元旧家のアルバム中に、本書掲載の曾根の絵葉書一枚と同一の写真が発見したが、絵葉書の存在を知らなければただの古い写真の一枚として日の目を見ることなく埋もれたであろうことを考えると、ますます絵葉書の重要性を実感する。

本書は考古学研究の一環であるが、ここで示された手法や成果は、地域の歴史研究や資料保存において、絵葉書をどのように扱っていくべきか、どのようなアプローチが可能かといったことを考えるうえで、大きなヒントを与えてくれる本と感ずる。何より、本書を読んですっかり自分の収集欲を掻き立てられたのであるが、さすがに今から全国各地の考古学絵葉書を集める元気も資金もない。しかし、地元はまだ埋もれている考古学絵葉書はないか、改めて探してみようという闘志と楽しみが湧いてくる本でもあった。

アルカ通信 No.211

発行日	2021年4月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
	TEL 0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp